

成人期の他者志向的達成動機への態度¹⁾

伊藤忠弘

問 題

他者志向的達成動機は、他者の期待に応えようとして、あるいは周囲の応援やサポートに対する「恩返し」を意識して、個人としての達成に向けて努力する動機づけである。スポーツ選手や著名人が自身の達成や成功を「お世話になった人への恩返し」として語るのは珍しいことではないが、大学生でも親や家族、教師、コーチや監督、先輩、友人などの重要な他者が努力を動機づける源泉として語られる（伊藤，2006）。大学生にこれまでの努力経験は「自分のため」か、「他者のため」か、その両方かを尋ねると、51%が「自分のため」、22%が「他者のため」、27%が両方と回答した（伊藤，2007）。

この他者志向的達成動機への態度を測定するために、達成行動の理由としての「自分のため」と「他人のため」について大学生より収集された72個の記述を因子分析して、尺度が作成された。現在の尺度は、①「自己志向的動機の重視（以下、自己動機重視と略）」、②「他者志向的動機の

1) 本研究は科学研究費助成事業基盤研究（C）「目標階層理論に基づく他者志向的動機と自己志向的動機の統合の概念化と適応性の検討」（平成28年度～平成30年度；代表者：伊藤忠弘）からの支援を受けた。

重視（以下、他者動機重視）」、③「他者志向的動機への負担感（以下、負担感）」（他者からの期待に伴って感じる不安やプレッシャーの存在）、④「他者志向的動機の利己性の認知（以下、利己性認知）」（結局は「自分のため」であるとする認知）、⑤「自己・他者志向的動機の統合（以下、自他統合）」、の5つの下位尺度25項目から構成されている。そしてこの下位尺度のなかで「自他統合」が就業動機の貢献志向（「社会に貢献できるような職業に就きたい」など）や対人志向（「常に多くの人との出会いがある仕事がしたい」など）と相関が高く、自己実現と社会からの受容を求める親からの期待の認知とも関連していた（伊藤・上淵・藤井・大家，2013）。ただし5つの潜在因子を仮定した確認的因子分析のモデルの適合度は十分な高さに達していなかった（伊藤，2020）。

従来の達成動機づけの諸理論では「他者」の阻害的側面が強調されてきた。例えば達成目標理論では、能力について他者から望ましい評価を得ようとして達成に従事する遂行目標は、能力を高めることを目標とする学習目標と対比して否定的に位置づけられている。しかし文化心理学の枠組みの中で達成場面における他者志向性が日本人の達成のあり方として提起されている（東，1994）。また教室のルールや規範の遵守を志向する社会的責任目標や教室内での協力や援助を志向する向社会的目標を持つことが、児童・生徒の学業達成を促すことが指摘されている（中谷，1996）。デステノ（2020）は、感謝、思いやり、他者からの受容に基づく誇りといった対人関係に基づく感情が動機づけを支え、さらには優れたパフォーマンスにつながることを実証的に示した多くの研究を紹介している。

本研究では、大学生以外の成人を対象に他者志向的達成動機への態度を測定する。大学生と同様の5因子構造が安定して認められるかを検討するとともに、30歳代と50歳代の因子構造と各項目の評定値の差異を検討する。さらに他者志向的達成動機への態度を構成する下位尺度の概念の妥当性を確認するために、仕事の目的意識との関連を調べる。最後に他者志向的達成動機を保持することが望ましい結果をもたらすという仮説の検証の

ために、適応的な感情や認識に相当する生きがい意識との関連を検討する。

方 法

調査対象者

30歳代150名（うち女性87名）と50歳代150名（うち女性81名）の計300名。

質問紙

(1) 他者志向的達成動機への態度尺度（伊藤，2020）「周りの人のため」に達成行動に従事することに対する態度を尋ねる25項目について、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4件法で回答を求めた。

(2) 仕事の目的意識 日々の仕事をするにあたっての重要性について、「挑戦」「生活向上」「人間関係」「他者評価」「社会貢献」「回避」の6カテゴリーに3つずつ計18個の項目を作成した。「あなたが日々の『仕事』をするにあたり、以下のことがどれくらい重要ですか」という質問の下で「とても重要である」から「ほとんど重要でない」までの5件法で回答を求めた。

(3) 生きがい意識尺度（今井・長田・西村，2012）成人期以降の心理的適応を測定するもので、「生活・人生に対する楽観的・肯定的感情」「未来に対する積極的・肯定的姿勢」「自己存在の意味の認識」の3下位尺度各3項目からなる。「とてもあてはまる」から「ほとんどあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

これ以外に冒頭に、性別・年齢（30歳代か50歳代か）と雇用形態について選択を求めた。

手続き

インターネット調査会社に委託し、2020年3月に実施した。

結果

他者志向的達成動機への態度尺度の世代間の比較

最初に25項目の評定値について2（性別）×2（世代）の分散分析を行った。性別の主効果は認められなかったが、世代の主効果は、「自他統合」2項目、「他者動機重視」2項目、「負担感」1項目の計5項目で有意であり、いずれも50歳代のほうが高かった（項目順に $F(1,296) = 13.02, 13.42, 8.70, 7.91, 8.40$ ）。またその他の項目も全体として50歳代のほうが平均値が高かった（表1）。また項目9のみ交互作用が有意であり30歳代男性で低かった（ $F(1,296) = 8.82$ ）。

次に世代別に最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行った（表1）。本来5つの下位尺度を構成する尺度であったが、固有値の減衰状況は、30歳代で20.00、7.38、2.28、1.58、1.17、0.98、50歳代で17.75、6.77、2.41、1.58、1.07、0.84であり、どちらも4因子解を採用した。第1因子の寄与率が30歳代で61.2%、50歳代で59.1%であり、4因子での累積寄与率は30歳代で95.7%、50歳代で94.9%であった。

30歳代の因子構造は、第1因子では「自他統合」と「他者動機重視」の項目が負荷量が高く、他者志向的達成動機に肯定的な態度に対応している。第2因子では「自己動機重視」、「利己性認知」、「負担感」の項目の負荷量が高く、他者志向的達成動機に否定的な態度に対応していた。第3因子と第4因子は、本来の下位尺度の観点からは解釈が困難であった。一方、50歳代の因子構造は本来の下位尺度の観点より解釈が可能であった。第1因子は「自他統合」の項目の負荷量が高く、第2因子は「他者動機重視」、続いて「負担感」の項目の負荷量が高かった。第3因子は「自己動機重視」の項目の負荷量が高く、第4因子は「利己性認知」の項目の負荷量が

表1 他者志向的達成動機への態度尺度の項目の平均値と因子分析

項目	下位 尺度	30歳代				50歳代				
		因子1	因子2	因子3	因子4	M	因子1	因子2	因子3	因子4
1 周りの人のためにがんばると、義務感と見返りを期待する気持ちがうまれる	負担		.44		2.25		.34			2.47
2 周りの人のためにがんばっても、その人が喜んでくれることが、結局は自分の満足感につながる	統合	.73			2.03	.64				2.15
3 自分の満足のためだけにひたすら一つのことを打ち込んでいる人は、孤独だと思う	他者		.51		2.92		.43			2.88
4 やる気が下がったときに、「周りの人のため」を支えにすることがある	他者	.69			2.43		.62			2.65
5 親や先生のためにがんばるのは、彼らを喜ばせる自分を好ましく考えているにすぎない	利己		.41		2.60				.78	2.68
6 「自分のため」でないとやる気を高くもつことはむずかしい	自己		.65		2.39			.75		2.39
7 「周りの人のためにがんばる」という言葉には、周りの人にとって自分が意味ある存在であることを確認したいという気持ちがある	利己	.51	.40		2.25	.58				2.48
8 「周りの人のためにがんばっている」と思うことによって、甘えがなくなると思う	他者	.46		.46	2.57		.44			2.73
9 「周りの人のため」は目的ではなく、良い結果が出た後についてくるだけである	自己		.54		2.37		.37			2.53
10 周りの人が喜ぶことで自分の存在意義を感じることもある	統合	.65			2.05	.63				2.36 **
11 周りの人のためにがんばると、結果がでなとき「申し訳ない」と思ってしまい負担である	負担		.33		2.23		.35			2.39
12 「周りの人のため」は「周りの人が喜ぶと自分もうれしいからがんばる」ということである	統合	.76			2.11	.90				2.19
13 「周りの人のために」という方ががんばりやすい	他者	.67			2.37		.74			2.72 **
14 周りの人のためにがんばることは、「人からよく思われたい」という思いにつながっている	利己		.44		2.21				.74	2.29
15 周りの人のためにがんばると、心の底から喜びが生まれる	統合	.78			2.39		.61			2.66 *
16 「自分のため」を優先にした方がいいと思う	自己	.70			2.17			.72		2.29
17 周りの人のためにがんばることは見返りも大きいがリスクも高い	負担		.41	.47	2.31		.48			2.57 *
18 最終的には「周りの人のため」の方が高い成果を得られると思う	他者	.69			2.49		.65			2.73 *
19 周りの人のためにがんばると、周りの人の期待がなくなったとき、やる気がうせてしまう	負担		.56		2.23	.33				2.44
20 「周りの人のためにがんばる」といっても、それは自己満足のように感じる	利己	.71			2.15				.50	2.27
21 周りの人のためにがんばると、「失敗できない」という大きなプレッシャーがかかる	負担	.49			2.22		.37			2.42
22 自分のためにがんばるというやり方でなければ自分を向上させられない	自己	.47			2.41			.65		2.58
23 「周りの人」はあくまで支えであり、目的にはならない	自己	.69			2.33			.49		2.32
24 周りの人のためにがんばることは、自分を人に認めてほしいということである	利己			.47	2.11				.52	2.32
25 応援してくれる人のためにがんばるのは、その人の喜ぶ顔やしぐさが見たいからである	統合	.67			2.13	.56				2.23

* : $p < .01$; ** : $p < .001$

注1) 因子負荷量は、.40以上を記した。 .40以上の負荷量をもたない項目は最も大きな負荷量を示した。

注2) 下位尺度名がイタリック体の項目は本研究では下位尺度に含めなかった。

高かった。

仕事の目的意識尺度の世代間の比較

最初に 18 項目の評定値について 2（性別）×2（世代）の分散分析を行った。世代の主効果は、「いろいろな人に出会うこと」「自分の能力が発揮できること」「努力を惜しまないこと」の 3 項目で 1% 水準で有意であり、いずれも 50 歳代のほうが高かった（項目順に $F(1,296) = 7.82, 6.78, 11.54$ ）。またその他の項目も全体として 50 歳代のほうが平均値が高かった（表 2）。性別の主効果および交互作用は有意ではなかった。

次に世代別に最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行った（表 2）。6 つの下位尺度を想定して作成した尺度であったが、固有値の減衰状況は、30 歳代で 30.46、5.06、2.11、1.69、1.12、0.96、50 歳代で 18.16、3.72、2.76、1.44、1.01、0.54 であり、30 歳代では 4 因子解、50 歳代では 5 因子解を採用した。30 歳代では第 1 因子の寄与率が 76.4%、4 因子での累積寄与率は 98.6% であり、50 歳代では第 1 因子の寄与率が 69.8% であり、5 因子での累積寄与率は 100.0% であった。

30 歳代の因子構造は、第 1 因子では「挑戦」「他者評価」「社会貢献」の 3 項目ずつ計 9 項目、第 2 因子では「回避」の 3 項目と「人間関係」の 1 項目、第 3 因子では「生活向上」の 3 項目、第 4 因子では「人間関係」の 2 項目が、最も高い因子負荷量を示していた。50 歳代の因子構造は、第 1 因子では「挑戦」の 2 項目と「社会貢献」の 3 項目、第 2 因子では「回避」の 3 項目、第 3 因子では「他者評価」の 3 項目と「人間関係」の 1 項目、第 4 因子では「人間関係」の 2 項目と「挑戦」の 1 項目、第 5 因子では「生活向上」の 3 項目が、最も高い因子負荷量を示していた。「人間関係」の 1 項目（周囲（職場）の人々との関係が良好であること）を除いて、想定した内容の項目はいずれの世代においても同一因子に高い負荷量を示していることが確認された。

表2 仕事の目的意識尺度の項目の平均値と因子分析

項目	下位尺度	30歳代					50歳代					
		因子1	因子2	因子3	因子4	M	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	M
1 いろいろな人に出会うこと	人間				.82	2.39			.72			2.76 *
2 周囲よりも経済的に豊かな生活を送れること	生活			.95		2.29					.58	2.46
3 みんなから期待されること	評価	.50				2.69		.39				2.86
4 短い時間で済ませること	回避		.74			2.25	.62					2.17
5 周囲（世の中）の役に立てること	貢献	.64				2.28	.74					2.52
6 自分の能力が発揮できること	挑戦	.44				1.97	.48					2.25 *
7 周囲（職場）の人々との関係が良好であること	人間		.46			1.96		.43	.49			2.15
8 金銭的に余裕がもてること	生活			.65		1.85					.65	2.01
9 周りから評価（賞賛）されること	評価	.65				2.34		.71				2.57
10 要領よく行うこと	回避		.52			1.84	.71					1.96
11 社会的な意義があること	貢献	.83				2.33	.88					2.51
12 難しい仕事に挑戦すること	挑戦	.52				2.63	.42			.46		2.76
13 人間関係が広がること	人間				.68	2.41				.81		2.65
14 生活の水準を今よりも上げる こと	生活			.63		2.13					.75	2.38
15 家族や友人に喜んでもらえる こと	評価	.55				2.22		.46				2.32
16 自分のプライベートに影響し ないこと	回避		.65			1.96	.53					2.23
17 他者（社会）に貢献すること	貢献	.87				2.37	.74					2.65
18 努力を惜しまないこと	挑戦	.89				2.24	.44					2.59 **

* : $p < .01$; ** : $p < .001$

注1) 因子負荷量は、.40以上を記した。.40以上の負荷量をもたない項目は最も大きな負荷量を示した。

注2) 下位尺度名がイタリック体の項目は本研究では下位尺度に含めなかった。

生きがい意識尺度の世代間の比較

生きがい意識尺度の9項目の評定値について世代別に最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行ったところ、いずれの世代においても3つの下位尺度に対応する因子が確認された。そのため、先行研究に従ってそれぞれ3項目の評定値の平均値をもって下位尺度得点とした。各アルファ係数は、「生活・人生に対する楽観的・肯定的感情」で30歳代が.82、50歳代が.88、「未来に対する積極的・肯定的姿勢」で30歳代が.86、50歳代が.86、「自己存在の意味の認識」で30歳代が.80、50歳代が.81であった。

この3つの下位尺度得点について2（性別）×2（世代）の分散分析を

表3 下位尺度の基礎統計量とアルファ係数

	30 歳代			50 歳代		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	α	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
自己重視	2.33	0.64	.75	2.40	0.56	.76
他者重視	2.46	0.67	.83	2.71	0.58	.80
負担感	2.25	0.68	.79	2.46	0.56	.63
利己認知	2.29	0.61	.73	2.44	0.58	.81
自他統合	2.08	0.64	.83	2.23	0.58	.80
人間関係	2.40	1.11	.82	2.70	0.99	.76
生活向上	2.09	0.91	.89	2.28	0.72	.79
他者評価	2.42	0.91	.84	2.58	0.74	.74
回避	2.02	0.76	.75	2.12	0.61	.66
社会貢献	2.33	0.90	.85	2.56	0.76	.85
挑戦	2.28	0.85	.82	2.53	0.72	.76
生活肯定	2.70	0.95	.82	2.96	0.95	.88
未来肯定	2.30	0.99	.86	2.68	0.93	.87
存在意味	2.79	0.92	.80	2.89	0.83	.81

行った。「未来に対する積極的・肯定的姿勢」で世代の主効果が0.1%水準で有意であり ($F(1,296) = 12.03, p < .001$)、50歳代 ($M = 2.68$) のほうが30歳代 ($M = 2.30$) よりも得点が高かった。それ以外は主効果、交互作用とも有意でなかった。

他者志向的達成動機への態度と仕事の目的意識の下位尺度構成

他者志向的達成動機への態度尺度と仕事の目的意識尺度について、最初に想定された下位尺度の項目のなかで、探索的因子分析により30歳代と50歳代に共通して同一因子に高い負荷量をもつことが確認された項目をもって下位尺度を構成した（表1、表2）。世代ごとの各下位尺度得点の平均値、標準偏差とアルファ係数は表3のとおりである。アルファ係数は50歳代の一部でやや低かったものの、全体として高い信頼性を示していた。

表 4 他者志向的達成動機への態度尺度の下位尺度間相関

	自己重視	他者重視	負担感	利己認知	自他統合
自己重視		.00	.53	.60	.24
他者重視	.06		.40	.38	.71
負担感	.38	.55		.64	.47
利己認知	.49	.28	.48		.53
自他統合	.16	.62	.43	.47	

右上：30 歳代：左下：50 歳代

表 5 仕事の目的意識尺度の下位尺度間相関

	挑戦	生活向上	人間関係	他者評価	社会貢献	回避
挑戦		.54	.73	.73	.86	.57
生活向上	.48		.40	.59	.52	.57
人間関係	.70	.43		.66	.68	.44
他者評価	.58	.53	.60		.80	.49
社会貢献	.75	.32	.60	.55		.51
回避	.36	.39	.15	.21	.30	

右上：30 歳代：左下：50 歳代

次に世代ごとに3つの尺度内での下位尺度間の相関を確認した。他者志向的達成動機への態度尺度では、「自己動機重視」と「他者動機重視」および「自他統合」、50歳代の「他者重視動機」と「利己性認知」を除く下位尺度間に.30以上の正の相関が認められた（表4）。仕事の目的意識尺度では、50歳代の「回避」と「人間関係」および「他者評価」を除く下位尺度間に.30以上の正の相関が認められた（表5）。生きがい意識尺度では、すべての下位尺度間に.40以上の正の相関が認められた（表6）。

他者志向的達成動機への態度尺度の妥当性

他者志向的達成動機への態度尺度の併存的妥当性を確認するために、仕事の目的意識の6つの下位尺度に対する他者志向的達成動機への態度の6つの下位尺度の他の下位尺度の影響を除いた偏相関を検討した。30歳代

表 6 生きがい意識尺度の下位尺度間相関

	生活肯定	未来肯定	存在意味
生活肯定		.51	.70
未来肯定	.43		.56
存在意味	.64	.59	

右上：30 歳代；左下：50 歳代

では、「他者動機重視」と「挑戦」、「人間関係」、「他者評価」「社会貢献」の間に有意な正の偏相関、「自他統合」と「挑戦」、「他者評価」、「社会貢献」、「回避」の間に有意な正の偏相関が認められた。また「自己動機重視」と「挑戦」、「人間関係」、「回避」の間にも有意な正の偏相関が認められた（表 7）。

50 歳代では、「他者動機重視」と「挑戦」、「人間関係」、「他者評価」、「社会貢献」の間に有意な正の偏相関が認められたのは 30 歳代と同じであったが、「自他統合」は「生活向上」、「他者評価」の間のみ有意な正の偏相関、「自己動機重視」は「回避」の間のみ有意な正の偏相関が認められた（表 8）。「負担感」と「利己性認知」は 30 歳代、50 歳代ともに、いずれの仕事の目的意識とも有意な偏相関は認められなかった。

生きがい意識尺度との偏相関

最後に他者志向的達成動機への態度および仕事の目的意識の適応性を検討するために、生きがい意識尺度の 3 つの下位尺度に対する、他者志向的達成動機への態度の 6 つの下位尺度の他の下位尺度の影響を除いた偏相関、および仕事の目的意識の 6 つの下位尺度の他の下位尺度の影響を除いた偏相関を検討した。

30 歳代では「他者動機重視」と「自己動機重視」の双方が「生活・人生に対する楽観的・肯定的感情」および「自己存在の意味の認識」と 0.1% 水準で有意な正の偏相関をもっていた。「負担感」は「生活・人生に対する楽観的・肯定的感情」と 1% 水準で有意な負の偏相関をもっていた。

表7 他者志向的達成動機への態度尺度と仕事の目的意識尺度の偏相関（30歳代）

	挑戦		生活上		人間関係		他者評価		社会貢献		回避	
	相関	偏相関	相関	偏相関	相関	偏相関	相関	偏相関	相関	偏相関	相関	偏相関
自己重視	.36	.26*	.26	.11	.23	.23*	.11	.08	.22	.10	.46	.24*
他者重視	.49	.22*	.32	.14	.49	.33**	.62	.34**	.61	.29**	.25	-.03
負担感	.38	-.06	.34	.09	.26	-.10	.26	-.12	.36	-.07	.41	.05
利己認知	.45	.03	.33	.04	.31	-.01	.33	.01	.44	.09	.47	.09
自己統合	.59	.29**	.34	.06	.45	.10	.62	.30**	.66	.32**	.45	.25*

*: $p < .01$; **: $p < .001$ （偏相関のみ有意水準を示す）

表8 他者志向的達成動機への態度尺度と仕事の目的意識尺度の偏相関（50歳代）

	挑戦		生活上		人間関係		他者評価		社会貢献		回避	
	相関	偏相関	相関	偏相関	相関	偏相関	相関	偏相関	相関	偏相関	相関	偏相関
自己重視	.20	.15	.29	.19	.13	.15	.11	.03	.16	.17	.41	.24*
他者重視	.34	.23*	.19	-.04	.30	.24*	.48	.22*	.45	.34**	.10	-.07
負担感	.18	-.13	.29	.12	.07	-.19	.33	.04	.19	-.18	.27	.04
利己認知	.26	.08	.24	-.04	.14	.00	.24	-.01	.22	.02	.43	.21
自己統合	.34	.12	.32	.22*	.28	.12	.48	.25*	.41	.16	.25	.10

*: $p < .01$; **: $p < .001$ （偏相関のみ有意水準を示す）

また仕事の目的意識の「挑戦」と「人間関係」は「未来に対する積極的・肯定的姿勢」と有意な正の偏相関をもち、「他者評価」は「自己存在の意味の認識」と1%水準で有意な正の偏相関をもっていた（表9）。

一方50歳代では、他者志向的達成動機への態度で「他者動機重視」が「自己存在の意味の認識」と1%水準で有意な正の偏相関をもつのみであった。また仕事の目的意識では、30歳代と同様に、「挑戦」と「人間関係」が「未来に対する積極的・肯定的姿勢」と有意な正の偏相関をもち、「他者評価」も「自己存在の意味の認識」と1%水準で有意な正の偏相関をもっていた（表10）。

表 9 他者志向的達成動機への態度尺度および仕事の目的意識尺度と生きがい意識尺度の偏相関（30 歳代）

	生活肯定		未来肯定		存在意味	
	相関	偏相関	相関	偏相関	相関	偏相関
自己重視	.21	.31**	.26	.17	.17	.29**
他者重視	.33	.35**	.43	.21	.52	.50**
負担感	.07	-.23*	.32	-.01	.19	-.13
利己認知	.17	-.03	.35	.02	.21	-.07
自己統合	.24	-.04	.46	.16	.32	-.13
挑戦	.37	.02	.75	.31**	.52	-.03
生活向上	.27	.04	.42	.03	.44	.14
人間関係	.37	.12	.64	.21*	.51	.13
他者評価	.39	.10	.57	-.09	.64	.29*
社会貢献	.37	.02	.69	.14	.57	.10
回避	.25	.01	.46	.04	.30	-.11

* : $p < .01$; ** : $p < .001$ （偏相関のみ有意水準を示す）

表 10 他者志向的達成動機への態度尺度および仕事の目的意識尺度と生きがい意識尺度の偏相関（50 歳代）

	生活肯定		未来肯定		存在意味	
	相関	偏相関	相関	偏相関	相関	偏相関
自己重視	.07	.06	.13	.12	.09	.07
他者重視	.31	.17	.21	.16	.39	.22*
負担感	.13	-.09	.04	-.18	.18	-.09
利己認知	.13	-.03	.18	.08	.19	.00
自己統合	.33	.18	.24	.11	.40	.20
挑戦	.37	.16	.68	.40**	.57	.19
生活向上	.11	-.17	.30	-.03	.33	-.03
人間関係	.33	.06	.58	.25*	.54	.16
他者評価	.35	.20	.34	-.16	.52	.22*
社会貢献	.31	-.02	.53	.02	.49	.04
回避	.12	.05	.23	.04	.19	.01

* : $p < .01$; ** : $p < .001$ （偏相関のみ有意水準を示す）

考 察

他者志向的達成動機への態度尺度の検討

本尺度は大学生が産出した自由記述に基づいて作成され、尺度を使用した研究の対象もこれまでは大学生に限定されてきた。本研究では大学生以外の成人の他者志向的達成動機への態度を初めて検討した。

探索的因子分析の結果は4因子解を示唆しており、想定された5因子は確認されなかった。30歳代の結果では、主に「他者動機重視」と「自我統合」の項目に高い負荷量をもつ他者志向的達成行動に肯定的な態度（第1因子）と「自己動機重視」、「利己性認知」、「負担感」の項目に高い負荷量をもつ他者志向的達成行動に否定的な態度（第2因子）がそれぞれ別の因子を形成していた。第3因子と第4因子は負荷量の高い項目の内容から解釈することは困難であった。一方、50歳代の結果では想定された下位尺度に対応する因子がほぼ確認された。第2因子のみ「他者動機重視」と「負担感」の両方の項目に負荷量が高くなっていた。30歳代と50歳代の結果が異なること、そして大学生で得られた5因子構造を確認できなかったことから、本尺度の因子構造が不安定であることが示唆される。

30歳代の第1、第2因子に高い負荷量をもつ項目、および50歳代の4つの因子に高い負荷量をもつ項目のなかで下位尺度を再構成した。因子分析の結果に対応して下位尺度間の相関が全体的に高かったため、他の下位尺度の影響を除いた偏相関により仕事の目的意識との関連を調べることで、下位尺度の妥当性を検討した。伊藤他（2013）は、他者志向的達成動機への態度と就業動機との関連を検討し、「自我統合」が社会に役立つ仕事をすることを求める「貢献志向」や仕事に人との出会いや調和を求める「対人志向」と高い正の相関関係にあることを明らかにした。本研究でも他者志向的な達成動機と仕事の目的意識としての「人間関係」や「社会貢献」の重視との関連が予想され、そのような関連が確認されれば、尺度の妥当

性が担保されると考えられた。

30歳代、50歳代ともに「他者動機重視」は「人間関係」と「社会貢献」の目的意識、さらに「他者評価」と「挑戦」の目的意識の間にも正の偏相関が認められた。また「統合」も2つの世代ともに「他者評価」の間に正の偏相関が認められた。この結果は「他者動機重視」および「自他統合」の概念と尺度の妥当性を支持する結果と考えられる。一方で、「自他統合」は30歳代で「社会貢献」や「挑戦」と共に「回避」と正の偏相関が認められた。50歳代では「自他統合」は「生活向上」と正の偏相関が認められたが、30歳代で確認された相関は認められていない。この結果は「自他統合」の概念と尺度の妥当性について検討の余地があることも示唆する。また「自己動機重視」は30歳代で積極的な目的意識である「挑戦」と「人間関係」および消極的な目的意識である「回避」の双方と正の関連が認められ、50歳代では「回避」のみと正の関連が認められた。後で述べるように、30歳代の「自己動機重視」は適応的な感情や認識と関連しており、この概念についても世代間の変化と共にさらに検討する必要がある。

他者志向的達成動機の適応性

他者志向的達成動機を持つことが達成行動を促進するならば、適応的な感情や認識の指標と関連することが予想される。「他者動機重視」は2つの世代で「自己存在の意味の認識」と関連があり、また30歳代では「生活・人生に対する楽観的・肯定的感情」とも関連していた。50歳代は30歳代よりも関連の程度は小さかったものの予想された結果が確認されたと言える。ただし30歳代では「自己動機重視」も「生活・人生に対する楽観的・肯定的感情」、「自己存在の意味の認識」と正の関連があった。「自己動機重視」と「負担感」の相関は大きく ($r=.53$)、「負担感」は「生活・人生に対する楽観的・肯定的感情」と負の偏相関 ($pr=.23$) があった。この結果から、他者志向的達成動機への否定的な評価を伴わない自己志向的達成動機を持つことは適応的な感情や認知と関連することが示唆さ

れる。また「自他統合」は生きがい意識との関連が見られなかった。「自他統合」と「他者動機重視」との相関が著しく高いため ($r_s = .62 \sim .71$)、他者志向的達成行動に自己志向的側面を加えること自体は適応的な感情や認識とは直接関連がないという可能性も考えられる。

仕事に対する他者志向的な目的意識も適応的な感情や認識と関連することが予想された。しかし社会貢献の意識は適応的な感情や認識と関連は認められなかった。また他者から肯定的な評価を重視した意識は2つの世代で「自己存在の意味の認識」のみと関連していた。「自己存在の意味の認識」は、「他人や社会のために役立っている」、「誰かのために必要」、「誰かに影響を与えている」と表される他者との関係のなかでの自分の存在の意識を指す。このため、「他者のため」に達成に動機づけられる者や他者からの評価を意識しながら自らの仕事に携わる者ほど高い水準の認識を持っていることは十分に解釈できる結果であった。

研究の限界と今後の方向性

本研究では、大学生以外の成人を対象とし、データ収集にあたっては、年齢の範囲のみを設定した上でインターネット調査会社に委託した。この手続きにより、必然的にこの調査会社に事前に登録している人が対象となっている。調査対象者は日本全国の都道府県に及んでおり、職業も多岐に渡っていた。

他者志向的達成動機への態度尺度の回答は、大学生の結果と比較して、因子分析により抽出された因子数が少なく、下位尺度間の相関も高かった。例えば、伊藤ら（2013）の質問紙調査では、「自己動機重視」と「他者動機重視」および「自他統合」の間には負の相関があり、「他者動機重視」と「利己性認知」の間は相関が認められなかったことを報告している。今回の研究では「自己動機重視」と「他者動機重視」の間には相関が認められず、それ以外は一貫して正の相関が認められた。ただし今回の下位尺度は伊藤他（2013）の下位尺度に含まれる項目の一部を削除しているため単

純な比較はできない。今回の項目間の高い相関が世代間差によるものなのか、調査会社への登録者というサンプルによるものなのか、それとも質問紙法かオンライン調査かというデータ収集の手法によるものなのか、明らかにしていく必要がある。

また、今回の探索的因子分析の結果を踏まえて構成した下位尺度のなかで、他者志向的達成動機の重視が自己存在の意味の認識の高さと関連があり、概念的に予想される結果が確認された。他の適応的な感情や認識の指標とは相関が認められなかったため、単純に肯定的な感情を通じて、あるいは肯定的な感情を生じさせるような心理学的要因によって媒介されているという別解釈はあらず、一定の妥当性が担保されたと判断できる。ただし、他者志向的達成動機により現実の達成が促され、最終的に自己存在の意味の認識が高まるという因果関係については、今後確認していく必要がある。

さらに、達成行動において他者志向的動機と自己志向的動機を統合できるなら、仮に困難に直面しても強力な動機づけを維持し続けることができ望ましい達成につながるという点で適応的であることが予測される。今回の研究でも、これに相当する「自他統合」は適応的感情や認識と正の相関が認められていた。しかし他の他者志向的達成動機への態度の下位尺度の影響を除いた偏相関では、有意な関係は認められなかった。特に30歳代では、「自己動機重視」と「他者動機重視」は個々に「生活・人生に対する楽観的・肯定的感情」および「自己存在の意味の認識」と有意な正の相関が認められたが、「自他統合」ではそのような相関は認められなかった。達成行動において、2つの志向性を対立させず共に維持することの意味・役割について、今一度検討する必要がある。

引用文献

東洋（1994）. 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて— 東京大学出版会

- DeSteno, D. (2018). *Emotional success: The power of gratitude, compassion, and pride*. Houghton Mifflin Harcourt, New York.
- (デステノ、D.住友進（訳）（2020）. なぜ「やる気」は長続きしないのか —心理学が教える感情と成功の意外な関係— 白揚社）
- 今井 忠則・長田 久雄・西村 芳貢（2012）. 生きがい意識尺度（Ikigai-9）の信頼性と妥当性の検討 日本公衆衛生雑誌, 59, 433-439.
- 伊藤 忠弘（2006）. 「最も努力した経験」における他者志向的動機の現れ方 帝京大学心理学紀要, 10, 27-44.
- 伊藤 忠弘（2007）. 自己・他者志向的動機の調整・統合過程への探索的研究（5）—クラスター分析に基づく被験者の分類の妥当性の検討（2）— 社会心理学会第48回大会発表論文集, 664-665.
- 伊藤 忠弘（2020）. 他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ —階層的クラスター分析と潜在カテゴリー分析による検討— 学習院大学文学部研究年報, 66, 143-162.
- 伊藤 忠弘・上淵 寿・藤井 勉・大家 まゆみ（2013）. 達成動機づけにおける重要な他者の果たす役割 —日本と韓国の比較研究— 調査研究報告 NO. 58 学習院大学東洋文化研究所
- 中谷 素之（1996）. 児童の社会的責任目標が学業達成に影響を及ぼすプロセス教育心理学研究, 44, 389-399.